九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

九州大学蔵『知顕集』について

藤島, 綾 九州大学大学院(修士課程)

https://doi.org/10.15017/11900

出版情報:語文研究. 73, pp.55-65, 1992-06-07. 九州大学国語国文学会

バージョン: 権利関係:

藤島

綾

伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ田野物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ田野物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ田野物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひ田野物語の末書に知知集といる。

伊勢物語注釈史上初の学究的研究書と称される『愚見抄』を、一伊勢物語注釈史上初の学究的研究書と称される『愚見抄』の手には「随分の奥義とのみ思」われ、「大納言経信卿の筆作とつたへ」られることで強い影響力を誇っていたであろう両書を真っ向から批判したこの記事には、兼良の自説に対する自信のほどがうかがえよう。事実、この『愚見抄』が後世の『伊勢物語』注釈は『愚見抄』の所説をしばしば踏襲したが、それとともに兼良がみせた『知顕集』への非難もくりかえされ、当時の『知顕集』観がみせた『知顕集』への非難もくりかえされ、当時の『知顕集』観がみせた『知顕集』への非難もくりかえされ、当時の『知顕集』観がみせた『知顕集』への非難もくりかえされ、当時の『伊勢物語』注釈は『最見抄』の『知顕集』批判の影響を最大に受けたのない。近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』注が、近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』注が、近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』注が、近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』注が、近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』注が、近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』注が、近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』に、

みありしを、一条の禅閣御所兼良公号*後成恩寺†古註を見やぶつけ、此女は誰、この人は何人などしるして信用しがたき事の伊勢物語にむかしは知顕抄など古注有て、段々にあやしき説を

もかならずしも規模とはせざる者也。

(『伊勢物語愚見抄』

りて、更に新注をなして愚見抄をあらはし給へり。(3)

を作り上げた兼良の功績を讃えている。と述べ、「あやしき説をつけ」た「知顕抄など古注」を退け、「新注

序を持つ藤井高尚『伊勢物語新釈』は、その序で、見抄』に全面的に依拠していたのに対し、国学者たちの間には『知見抄』に全面的に依拠していたのに対し、国学者たちの間には『知見抄』に全面的に依拠していたのに対し、国学者たちの間には『知転集』にも『伊勢物語』がである。正とえば、文化九年の自ところが、やがて、別の新たな動きもでてくる。国学者達が『伊ところが、やがて、別の新たな動きもでてくる。国学者達が『伊

すこしにてもまされるかたにつきてさだめたる此本ぞ。きて見せけるなど、こたびひとつにとりならべて見わたして、まきにまれく〜によき事ありきとて、清水浜臣のかきとゞめおまた同じ所(筆者注 屋代弘賢)にて、知顕抄のふるきうつし

本文の校合に用いている。)

つ宝暦十二年のことである。称)が書写されたのは、このような『知顕集』見直しの動きに先立体)が書写されたのは、このような『知顕集』(以下九大本と略本稿で紹介する九大附属図書館蔵本 『知顕集』(以下九大本と略

_

幅な脱落と思われるのは次の二箇所である。ず、この部分を九大本と比較してみた。その結果、島原文庫本で大村洋一氏がその脱落と判断される箇所をすでに指摘している。ま桐洋一氏がその脱落と判断される箇所をすでに指摘しているは、片続群書類従本系統『知顕集』のうち、島原文庫本については、片

本は、一つは、和歌の六体について述べた序文の記事である。島原文庫

となり、これをあてるときは、さかさまにあたるなるべし。となり、これをあてるときは、さかさまにあたんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくだいごこんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくだいごこんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくだいごこんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくだいごこんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくだいごこんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくだいごこんとあたること也。このうたのすがは、いはんや五かといふて、これには、かみしものくもさだめず、いはんや五かといふて、これをあてるときは、さかさまにあたるなるべし。となり、これをあてるときは、さかさまにあたるなるべし。となり、これをあてるときは、さかさまにあたるなるべし。となり、これをあることもでいる。

三〇二夏

と明らかに脱落している。一方、この部分に対応する九大本は、

り。の句を限るともなし。たゞいくらにてもあれ、いゝつゞくるなず。いはんや五体五根とあつる事なし。此哥のすがたはいくつを一首とさだむる也。故に短哥と云。是には上下の句もさだめ先、短哥と云は、哥の句をふたつにさだめて、五七とも十二字

風、空の「五輪也。其すがたは、わかつ也。五句と云は、さきにいゝつるがごとく、地、水、火、次に、長哥と云は、哥の文字を三十一字にさだめ、句を五句に

と云り。第一の五文字をば頭句と云。是は空也。第二の七文ば 年の花それとも見へず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝ

しき哥をよみつれば六根まつたからず、五体さだかならず、 とかなしみて、 くるしみある衆生をつくるゆへに、いまだ輪廻をはなれぬ哥 わたりて不具なれば、腰をれ哥と云なり。 と云、下句にたゝりあれば腰の病、 若難あれば頭の病と云、中句(本ノマヽ)に病あれば首の病 百の仏をつくる。千の哥をよめば、千の仏をつくる也。上句 もにかけざれば、即五根五力の仏をつくる。百の哥を読ば、 相になぞらへつる、真実の哥の本とは思べし。五句一の心と 体にのぞむる時は、 字をば尾の句と云。 是は火也。第四の七字をば腰の句と云。是は水也。第五の七 旋頭哥と云は、上句の外に五字にても七字にても句を 能くさばくりなをすべき也。 足の句などにあたる也。 是地也。 是はおはりの句成べし。衆生の 尾の病と云。上下の句に 故に心得ずしてあ 此長哥を三十二

字をば首の句と云。是は風也。第三の五字をば胸の句といふ。

も君かきまさんみまくさにせん出をかにかるおきな(イニおのこ)しかなかりそありつゝ一句よみぐせる也。たとへば、

よみたらざる也。たとへば、次に、混本哥と云は、五句の内に五字にても七字にても一句とよめり。ありつゝもと云句をよみぐしたり。

是はじめの句を一句よまざる也。ゆふかげまたでちりやすきたゞあさがほのはなのなぞかし

- むら草にくさのなはもしそなはらばなぞしも花のさくにさ心同詞よまるゝ成。たとへば、火、廻文哥と云は、三十十一字の哥をさかさまによむも、同

くらん

と云り。

けおり

と云り。

なる。是をあつる時にさかさまにあつる成べし。れ、迷のまへには地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天のちまたとこれらの六体は、さとりのまへには六道の法身の仏とあらは

波」の説明である。島原文庫本が、もう一箇所の島原文庫本における大きな脱落は、第二十三段、「白と、和歌四首を含め大幅に補うことができる。

きみがゆくへ、そなたのやまとみるばかりと、よめり。き。一にんは、くもはなたちはいろ(脱落)いこま山をだに、そのゆへは、むかし、たいこくに、二にんのぬす人の長本あり

(三四七頁)

とのみ伝えるのに対し、九大本は、

白波と云。但、緑林は山にては手もきゝ心もきゝたりけるが、立の長本也。名をば緑林と云。一人は海賊の長本也。名をば其故は、むかし大国に二人の盗人の長本ありき。一人は「山

はなにものぞや。 里海に出ては心もきかざりけり。しら波は海にても里にても 里海に出ては心もきかざりけり。しら波と云事をたよりにして、をきつの言葉をそへ 云なり。しら波と云事をたよりにして、をきつの言葉をそへ がと此哥にをきてよめるなり。風の吹はさはがしければ、風ふけ たる哥なり。又、ぬす人のある山はさはがしければ、風ふけ たる哥なり。又、ぬす人のある山はさはがしければ、風ふけ たる哥なり。又、ぬす人のある山はさはがしければ、風ふけ はと此哥にをきてよめるなり。風の吹はさはがしき事なり。 はと此哥にをきてよめるなり。風の吹はさはがしき事なり。 はとにものぞや。

唱(さて、く、哥と、内にさだまりて有人のかず也。うつはものとはひきれ也。内にさだまりて有人のかず也。うつはものとはひきれ也。かならず水にさし入て要にあふ物なれば、舟こぐかひのかた答(いゝがひとは飯もる板の名也。此板は、いゝをもる時、答)いゝがひとは飯もる板の名也。此板は、いゝをもる時、

問って、又、哥に、

君があたりみつゝをらなんいこま山雲なかくしそ雨はふ

と云り。是は何といふ心ぞや。

答 是は河内国にいこま山といふ山あり。此山に雲だにも

雲はなたちそひそ、いこま山をだに君が行ゑそなたの山とみる哥よめる雨と云は我なみだのあめなれば、涙の雨はふれどもかゝりぬれば、日をもへだてずやがて雨のふる山也。されば此

ばかりとよめり。

いる。そのほかに、片桐氏が島原文庫本に指摘している脱落とそれと、詳細な説明に加え、さらに高安の女とのいきさつにも言及して

に対応する九大本の記事は次のとおりである。

	ニーケ真
ましとも思はざりけるに、 ましとも思はざりける、これもむつ 子三人ありける、これもむつ	しともおもはざりけるに、 (脱落力) なんじ、によし三 (脱落力) なんじ、によし三 で。さればなつかしきこと
らん所は皆申べし。 〔序〕	し。〔二一二頁〕
せ奉らんずれば、其段にいたも、皆をしたてゝ一ぺんきかん。	つらんずれば、そのだんにいしたてゝ一ぺんきかせたてまたゞいまいはずとも、みなをたまはらん。それ(脱落カ)
らはしなむ。うけたまはらは、いつの物がたりぞ。悉あ問 さて、かの十六段と云	ゲ〜くあらはしたまへ。うけは、なにの物がたりぞ。こととふ、さて十六だんといふ
遍、序、題、興、流と云。 (序)	つぎにうたに五句あり。いはつぎにうたに五句あり。いは
九大本	島原文庫本

もとには、と云り。 もとには、と云り。 もいわぬ女のさすが成けるが	落カ)。 「二四八頁」すがなりけるがもとには(脱すがなりけるがもとには(脱されば、このことばにも、あされば、このことばにも、あ
に、ことにをぼつかなし。其 放は、先、詞に、うまじかりけ ななとは何事ぞや。	(二三三頁) だカ)うまじかりけるをんな ドカ)うまじかりけるをんな とは、なにごとぞや。 いづれも、このことばに(脱
も、今はなつかしく成ぬ。 も、今はなつかしく成ぬ。 も、今はなりといへど	カ)なりぬ。 〔二一七頁〕 りといへども、いまは(脱落 これをきくに、かたちことなかゝるあいだ、このさいし、

摘しておく。 「いかがある。ここでは解釈の上で重要と考えられる箇所を二三指 このほかに、九大本と比較した場合、島原文庫本に脱落が想定され

わがいる山のかぜはやみと① (十九)	島原文庫本
又男のかよふはすさまじとよ我いる山のかぜはやみとは、	九大本

は、またおとこのかよふは、 のきえずみなり。〔二七一頁〕 ついまつのすみは、たいまつ 也。そのさかづきのさらに、 さきせのちぎりかなといへる の江にゑんのじをそへて、あ ぬれぬほどのあさき江也。そ ③こたふ、かち人のわたれど こたふ、哥の心は、うへとう けるぞや。 ②とふ、〈中略〉このきくは、 こたふ、これはみなもとのい 物なれば、かくたとへたり。 ぜのはげしきは、すさまじき すさまじとよめる。やまのか へぬる後は、はなこそちれど いかなる人のせんざいにう^ たるといふなり。〔二四一頁〕 ねはかれぬぞかし。 <u>三</u>士 へたり。 也。其盃のさらにつひまつの 江とは、ちぎり也。されば、 也。哥の心は、うへとうへぬ 問 あさきゑんの契り哉といへる に縁の字を制(ソへ敷)て、 の江とは、あさき江也。其江 かち成人のわたるにぬれぬ程 はかれぬぞかし。 る後は、花こそちれども、根 は何とよめるぞや。 の前栽に植けるぞや。 云人也。 答 是は源の至(イタル)と 問 又、かよひける男はたれ めり。山の風はげしきはすさ 人ぞや。 まじきものなれば、かくたと 〈中略〉此菊はいかなる人 かち人のわたれどぬれぬ 染殿の御前に植ける草 (第五十一段) (第十九段) 哥の心

り。

「第六十九段」
の尻居也。つひまつのすみと
の尻居也。つひまつのすみと

一方、これらとは逆に、島原文庫本には存在するが、九大本には致していなかった。③もまた、目移りによる脱文である。り、島原文庫本は、脱落のため文意が不明瞭になったと考えるほうり、島原文庫本は、脱落のため文意が不明瞭になったと考えるほうり、島原文庫本は、脱落のため文意が不明瞭になったと考えるほうり、島原文庫本は、脱落のため文意が不明瞭になったと考えるほうり、島原文庫本には存在するが、九大本には、第十九段と第二十段の一部でありは、『伊勢物語の研究』資料篇』では、第十九段と第二十段の二段

が、島原文庫本は、

つは第四十四段、

「あがたへ行人にむまのはなむけ」 をした人

脱落したと考えられる記述もある。そのうち二箇所を挙げる。

けしけるなり。
「二五九頁」はいふ二人、おはりのくにへくだらんとしけるを、よびてはなむいふ二人、おはりのくにへくだらんとしけるを、よびてはなむいかでいふとおぼへたり。この人はふぢはらのとしゆきがさこれはおはりのくにへくだる人、あがたへゆくといひたれば、

と述べ、藤原敏行夫妻とするのに対し、九大本は、

是は尾張国へ下たらんとしけるをよびてはなむけしける也。

においても、 とのみ記し、 島原文庫本では、 敏行夫妻には直接言及していない。 また、 第六十九段

おんなのかたよりは、なをすゝみてあはばやとおもひける じともおもはずとは、まさに、いたうあはじともおもはぬ也。 われてあはんとは、 ひだうにあはむと云心なり。おんなかた、いとあは われはあるべきなかなれば、 ことはりを

いかなることぞや。 なきわらはゝたれぞ。また、ねひとつより、うしみつとは、 とふ、月のおぼろなるに、みれば、 してあるに、まだなにごともかたらはぬに、といへり。おさ るところにいりて、ねひとつより、うしみつまで、物がたり たてゝ人たてり。かぎりなくうれしくとおもひつゝ、わがぬ ちいさきわらはべさきに

めの一まは、 を、はからふことあり。然るに、 あぶらにても、みづにてもあれ、これをもととして、その時 ときさだまりありて、一ときを、四つにわりて、はからふに、 といふ。ことし九さいになりける。是は、いせがおさなかり は、しさい有。そのゆへは、斎宮わたらせたまふところに、 しときのことなり。また、ねひとつより、うしみつといへる かみ、ふぢはらの継蔭がむすめなり。なをば、よひとのまへ こたふ、おさなきわらはべはうへはらはなり。 つゝみを一まきて、たつの一てんとしり、二ば 一時を四つにわけて、はじ これは伊勢の

> には、三まき、たつの三てんとしり、 んには、つゝみを二まき、たつの二てんとしり、三ばん 四ばんには、 四まき、

たつの四てんとしるなり。かやうに、 ゝにわけて、 四十八時をつくりいだす也。 よるひる十二 一時を四づ

べるが、これに対応する九大本の記事は、 と詳細に語句の説明をし、「わらはべ」が幼時の伊勢であることを述

を四づゝに分けて四十八時を作りて出す也。 辰の四点 (本ノマン テン歟)と知り、 かやうに夜る昼十二

と島原文庫本に指摘した箇所を欠く。

Ξ

問をはさむ余地はあるまい。ところが、ここに一つの問題がある。 多くの一致をみることを前提としていることは言うまでもない。 合がある。 奇妙なことに、 そらく、島原文庫本と九大本が同じ系統の本文であることには、 が、この作業は、その二本が同系統に属し、 りによると思われる脱落のうち、お互いに補い得る事例を指摘した 前節では、 島原文庫本と九大本を比較し、それぞれに書写時の誤 この二本は、 同じ章段について異なる解釈を持つ場 内容や言い回しなどに

その一つが、

第五段に関する記述である。

業平が二条の后のもと

集』がある。(52)人」を、九大本同様「遠経」と解釈するものには、書陵部本『知顕人」を、九大本同様「遠経」と解釈するものには、書陵部本『知顕 九大本では、「姫君の弟遠経」になっている。ちなみに、この「心有 が、島原文庫本では、「姫君のおとゝ、くにつね」であるのに対し、 に「ついぢのくづれより」忍んでいくのを黙認していた「心有人」

もう一つは第八十段の記事である。島原文庫本は、

もとへたてまつりける。 のありけり。やよひのつごもりに、雨そほふるに、おりて人の とふ、むかし、男、おとろへたるいゑに、ふぢの花うへたる人

ぬれつゝぞしゐておりつるとしの内に 春はいくかもあらじと思へば

といへり。此哥の心はいかにとよめるぞや。又、おとこはたれ

あらじといふ、尤おもしろきなり。おとこは業平の事也。 つごもりを、春はけふのみとよみては、曲なし。春はいくかも ひて、雨とも藤ともいはざるは、詞書にゆづればなり。三月の こたふ、雨をば、ぬれつゝといひ、藤をば、しゐておりるとい

(三七四頁)

る。

るいゑ」が誰の家か、あるいは藤の花を誰に奉ったかにはふれない。 と藤の花を折った人が業平である事を述べるだけで、「おとろへた

これに対し、九大本は むかし男をとろへたる人の家に藤の花うへたる人有けり。

> ける、 それを、三月晦日に雨のそをふりけるに、折て人のもとへ奉り ぬれつゝぞしゐて折つる年の内に春はいく日もあらじとおも

答。是は紀有常が家也。をとろゑたるとは、まづしく成ける也。 又、藤の花をある人は、業平也。奉る所は、染殿の后の御もと といへり。此哥の心はいかにとよめるぞ。又、男は誰ぞや。

と、「をとろへたる人の家」が紀有常邸であること、藤を折った人が としの春の一日もあるまじきと也。 也。春はいくかもあらじとは、今日は三月晦日なれば、今はこ

に対し、過剰ともいえる「答」である。ちなみに、この解釈は、『知 て記す。ここでは「哥の心」と「男」が誰かを問題にしている「問」

業平である事を述べた上で、その花を染殿の后に奉ったことを重ね

本文が古形をとどめているのか。現段階では判断の難しい問題であ 顕集』のいわゆる末書とされる『和語知顕集』と一致している。 同系統本文におけるこの解釈のちがいをどう捉えるか。どちらの

五

について考察する場合、 統に属する島原文庫本と比較しつつ、述べてきた。しかし、九大本 これまでは、 九大本『知顕集』のいくつかの特徴について、同系 特筆すべきは『伊勢物語』第四十九段に関

する次の記事である。

みおりて、トニニムなり。おかしず戊とは、可というべきや。問 むかし男いもうとのいとをかしげなるを、琴をしらぶとて

て興有事也。 〔第四十九段〕答 おかしげ成とは、よき也。物のおかしきとは、心にかなひみおりて、と云なり。おかしげ成とは、何と心うべきや。

れない。つまり、今日この本文は九大本にしか伝わらないことになまったく異なった注を加えるのを除き、第四十九段の記事が認めらには、わずかに前にふれた『和語知顕集』が内容において九大本とをも、書陵部本系統、続群書類従本系統を問わず、『知顕集』

う事実を示す記事がある。四十九段を持つ『知顕集』の存在が一定の人々に知られていたとい四十九段を持つ『知顕集』の存在が一定の人々に知られていたといしい。今日さほど注目されないが、近世において、九大本と同様のところが、この本文は九大本に限っての独自本文ではなかったら

る。

なるとは艶にうつくしきことなり。もうとも異腹にいあいあらんとやうにいへり。いとおかしげもうとも異腹にいあいあらんとやうにいへり。いとおかしげましをいひてさだめいへる事どもいとよし。さてこゝなるい態筋に異腹のいもうとは后にたゝせたまへることもありつるむかし男いもうとのいとおかしげなるが琴ひきけるを見をりて

じである。

○おかしげなるが琴ひきけるを 知顕抄の古写本の一本にか

さらに、この本と相前後して出版された屋代弘賢の『参考伊勢物

語』にも次のような記事がある。

けなる琴をしらふとてみをりてと有。これにてねよけのことはもふ。 六条宮御本と知顕抄とにむかし男いもうとのいとおかしうらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはんことをしそお四十九 ねよけ ことをしそ

(文化十年自序)屋代弘賢『参考伊勢物語』四十九段)ことをしそこ詞よくきこえたり。

なお、屋代弘賢が所持した『知顕集』には九大本と同じ奥書を持

述べるというわずかな違いはあるが、九大本の伝える本文とほぼ同述べるというわずかな違いはあるが、九大本の伝える本文とほぼ同れ『琴ひきける』とするのを、『参考伊勢物語』本文は、『伊勢物語新釈』する点で共通している。しかも、一見してわかるように、彼らが引する点で共通している。しかも、一見してわかるように、彼らが引い書にさらに、『参考伊勢物語』を用いて橘守部があらわした『伊勢つものがあったことが、大津有一氏によって指摘されている。このつものがあったことが、大津有一氏によって指摘されている。この

ては、一応の根拠があったはずである。た、彼らが一様に第四十九段に『知顕集』本文を引用するにあたった、彼らが一様に第四十九段に『知顕集』本文を引用するにあたった氏の指摘するところだが、いかにそれらが緊密であったとはいこの三人の交友とその著書の相互関係については、すでに田中宗

その理由を藤井高尚は次のように述べる。

琴ひく事なき本は源氏物語に此事をいへるにたがへり。角総巻

見をりてとはをしへなどするさまなりとこゝろえてさやうにか けるなるべし。きんをしへたる所とは絵やうをいへる詞なり。 ばんといひたるを見てとあり。もの語絵かく人の琴ひきけるを に在五が物語をかきていもうとにきんをしへたる所の人のむす

(『伊勢物語新釈』)

文の存在が問題とされてきた。)総角の巻の記事に基づいて、業平が妹に琴を教える場面を伝えた異 第四十九段については、高尚が言うように、古くから『源氏物語

たのである。 語』第四十九段本文を伝える意義は大きい。高尚らは、『源氏物語 状況の中で『知顕集』が『源氏物語』総角に記すとおりの『伊勢物 たり、特殊なものと言えよう。『源氏物語』の記事に合致する『伊勢・ 賢は、この第四十九段本文を伝える本として「知顕抄」と「六条宮 もかけはなれた存在だった。先に挙げた『参考伊勢物語』に屋代弘 が知られるが、中世から近世にかけてのそれらは人々からあまりに 今でこそ、最福寺本、時頼本、伝為頼本、伝後醍醐天皇宸翰本など の記述に基づきこの本文を評価し、その著書に『知顕集』を引用し 物語』は、当時一般には知られていなかったのである。このような 本」を並記するが、この六条宮本は今日で言うところの時頼本にあ 『源氏物語』総角どおりの第四十九段を持つ『伊勢物語』本文は、

『知顕集』は貴重な資料と言うことができよう。 そして、今日、 この第四十九段を直接伝える点において、 九大本

六

り、約半世紀ほどさかのぼった頃の写本である。なお、奥書は焼失 奥書に「元文庚申如月廿日写之 水竹居作禄」、書写の際の奥書には 七・七センチ、横十八・八センチ、楮紙袋綴の一冊本である。 著名な堂上派歌人馬詰親音(一七四八~一八〇八)のもの。 さらに、書写奥書の下に「矢部」の印がある。「馬詰文庫」は土佐の モテに「馬詰文庫」「音無文庫」「九州帝国大学図書印」の蔵書印 した徳島光慶図書館旧蔵本(屋代弘賢旧蔵本)と一致する。一丁オ は「知顕集上下」、内題に「伊勢物語知顕集」とある。墨付九十丁。 「宝曆十二巳五月廿日写之畢 最後に、 簡単に書誌についてふれておきたい。九大本は、縦二十 紙員九十葉」。続群書類従の編纂よ

- (1) 片桐洋一氏『伊勢物語の研究 資料篇』所収。
- (2)この点については、松田武夫氏「伊勢物語知顕集の再吟味」(「文学」昭 和十一年五月号)に詳しい。
- 3 以下本文の引用は寛文元年板『拾穂抄』(九州大学国語学国文学研究室 蔵)によった。
- (4)以下本文の引用は文政元年板『伊勢物語新釈』(九州大学附属図書館 蔵)によった。
- (5)また、石上宣続の『卯花園漫録』(文化六年自序 「日本随筆大成第二 期」十二所収)は、 源氏物語や徒然草の注釈書に並んで、

○伊勢物語は、 知顕抄〔不知

逍遥院殿家説

初冠(同断

惟清抄〔舟橋三位環翠軒〕

秘訣抄

(高田宗賢)

患見抄 (一条禅閣)

拾穂抄 (季吟) 山口記(宗祇)

真名伊勢物語〔六条宮御撰と云〕

6 九州大学蔵『知顕集』は、「文献探求」第二十八号及び二十九号に全文 と、「知顕抄」を伊勢物語注釈書の一つに挙げている。

を翻印、掲載した。以下本文の引用はこれによった。

(8) 注1に同じ。 (7)「続群書類従」十八輯上所収。

10 (9)片桐洋一氏『伊勢物語の研究 右に同じ。 研究篇』。

(11)以下島原文庫本の引用は、注1による。なお、引用の際にはその頁数を

示した。

12 (13) 天理善本叢書『和歌物語古註集』所収 注1に同じ。

(4)引用は文化十四年刊『参考伊勢物語』(九州大学附属図書館蔵)によっ

(15) 大津有一氏『伊勢物語古註釈の研究』。

(16)田中宗作氏『伊勢物語研究史の研究』。 (17) 通行本の本文は、

よげに見ゆる若草をひとのむすばむことをしぞ思(ふ) むかし、おとこ、妹のいとおかしげなりけるを見をりて、うら若み寝

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思(ひ)ける哉 と聞えけり。返し、 (日本古典文学大系『伊勢物語』四十九段)

18 元貮年中秋上六日主平時頼と筆もてしるしたり。六条宮の御名はみえ 「時頼朝臣の本なり。かた仮名にて書て奥に具平相傳本と朱もて其記寛

とし、『源氏物語』総角に言うような琴を弾く描写はない。

(19) 中野三敏先生のご教示による。 たれど真名本とはおなじからず。」

(『参考伊勢物語』序)